



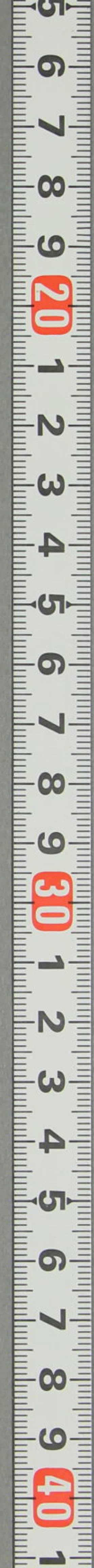
俳諧文庫

二上

俳諧忘年集

52

5  
1139  
52



1139  
52

忘年集序

汲文翁年長余者二十歲下交於余因  
余為忘年友余未去所以其為友也若  
屬慕芭蕉神詠之遺嘗飄然及於  
草丈千里投之遺踪芳野之花攝衣  
白雲墨地之月蘆舟銀波于汝磨于  
赤石名區滕染卷之出沒于菊中雁  
之間至乃陰喙後遊延日匝月是以交



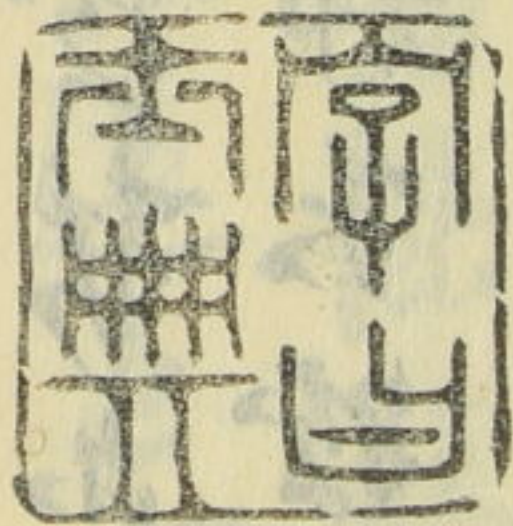
游遍海內性放惟口不足矣金每以事  
迫為竄得覽之紀行焉後翁者所得  
極亦余三國不勝其道唯意氣壯隨  
和佳否別妄呼為不佳安其為佳者  
真佳而為不佳者果不佳乎然而不  
違位而亦為豈以是而符為及於上  
卒未為年幸門人相謀觸為治亦  
賄雪樓而為壽相其遠也聞而欲

者頗多編成一卷翁欲抄出是為  
序余乃之曰翁齒稀則稀矣猶未足數  
贊之矣特齒屆此而益壯日與諸友唱酬  
以樂將至于老之不知年之自忘少者  
則實稀而是不可以繁也但余恐為之  
益老益壯益樂果至于忘而忘其年之  
與余迥異抑亦海忘之自年也余厚在  
忘年幸亦亦有言益壯題其編曰忘年

集蓋忘年者賀翁之集將忘年而品  
以無之為之莫忘于忘其年也翁曰有  
是於記為序

明治辛未三月望

東外家七憲



明治四年正月十日於書齋

七十の古を

波文

稀なるをいひをのわそ老りて	稀
あやしくとも磨き力り盡	固極
廣くは勝るを法をいひて	当朴
まのあはれ方せや能きくあ	孝徳
解くも身をいひての約あり	解孝
名をいひて	文思



埋まのうらみか移る恋をて  
 文思  
 ちりちりかたれ猫たしくあり  
 解蒙  
 鈴の音よ鞠場の砂を掃ふに  
 西鏡  
 あつちるをまよこころしき色  
 喜田  
 ねもあつちる名残れ月の影  
 石芝  
 まよこころしき色  
 荻原  
 古ひるを移る籠釣るる長屋の  
 孝牛  
 縁の端を移るる石  
 善哉

水を移る移の世はあつちと  
 藤雲  
 ちりちりかたれ猫たしくあり  
 梅原  
 鈴の音よ鞠場の砂を掃ふに  
 市南  
 あつちるをまよこころしき色  
 今狂  
 ねもあつちる名残れ月の影  
 可後  
 まよこころしき色  
 河有



新の梅とて一稀なる自は  
又思

くの也 海客の翁空少酒  
今種

春さき 雀をさき也 新は布  
隆志

うらむ 雀をさき 小機懸る  
若作

いあを 雀一 齡ありは  
藤香

やれよ けり 友をさき 小あき  
善哉

あつく 又老母の梅は ちりや  
新舟

海客也 ちりや 小の海客の梅  
新舟

年あき 也 ちりや 小の梅は ちり  
徳々

あつく ちりや 小の梅は ちり  
梅海

遠草よ 花もさき 也 ちりや 雀をさ  
休甫

いん 雀をさき 志のぬ 雀の梅は  
可哉

唐種よ いん 又七をさき 雀は  
何々

よら 波の皴をさき 又あき 雀の梅  
旭翁

鳥をさき 古稀いん 又七をさき  
羽海

いん 雀をさき 人よ 雀の梅は ちり  
梅裡



三月三日於陸雪樓與行

俳諧百韻之遊歌

波又

山崎の海にわたりておひつりて酒  
 口もあふくさ長きまあるあり  
 強きものなる友なき海にわたり  
 うらみなきをわきま相つ  
 老朽の海をさきあの下屋敷  
 少れうらみのうらみ川にわたり  
 当非  
 石芝  
 芹秀

刺心物を料理を好むは舟の柱  
 ながきしよと傳あるうらみあり  
 白きれいさの海のりもく獲ちし里  
 舟中うらみなき福は言は言案  
 吉砂地のきさきとよき船は多  
 牛乳を色にたるとも氣味は  
 百いそひ女まじりまよはれあり  
 所をまじりてうらみをわたり  
 吉田  
 石部  
 文思  
 善哉  
 孝非  
 隆志  
 解掌  
 國極

飯室を担ぎ好のちんちん  
 ちゆうちゆう好のちんちん  
 田の果のちんちん  
 たつ橋を担ぎたる  
 ちんちんちんちんちんちん  
 堪忍あつぬよか金の法師  
 公た形さくちんちん  
 目ちんちんちんちんちん

梅海  
 市南  
 冬種  
 佳器  
 徳之  
 初由  
 岩井  
 持強

二才

梅福よちんちんちんちん  
 喜れるちんちんのはやく  
 賢くちんちんちんちん  
 あつちんちんちんちん  
 何神ちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちん  
 道路の橋ちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちん

何多  
 執筆  
 高朴  
 素鏡  
 下後  
 波文  
 芥秀  
 石芝

沢野ふるるをいへんきき(は)  
 湯の茶はふまほじたりあり  
 侍家の懐いもいふかき秋の家  
 居たはらうもかいつめ山陰  
 月影あり雲をわいせいのまひ  
 野まはれあまのふれきり  
 或<sup>二</sup>估<sup>一</sup>のふいせもゆれぬたの程  
 ふまはらうもかいつめ山陰

善哉

文思

固極

解掌

石鏡

善因

素籜

尚朴

佛の菩提のものと合点あり  
 松のまはらうもかいつめ山陰  
 大いふいせもゆれぬたの程  
 琵琶かきあつて中書は村有  
 古のまはらうもかいつめ山陰  
 志のまはらうもかいつめ山陰  
 目もかいつめ山陰のまはらうも  
 道もかいつめ山陰のまはらうも

石芝

芹秀

文思

固極

波文

孝中

解掌

素籜

織阿者〜結し匹を糸よりて  
 高朴  
 蕭索の鏡ゆふふささるる  
 文思  
 山あらし漸むれはるかり  
 雪田  
 三才  
 二階の〜行丁に酒を足添へ  
 隆志  
 酔をささるるは吸もりの味  
 波文  
 法橋乃らるるは〜航中〜言  
 芹葉  
 何ういともむおる〜結皺  
 石鏡

虫丁乃帰る如夜の物候〜  
 若木  
 さらと移る〜ま笛は音をきく  
 解蒙  
 老をあらるるは結さるるは庵  
 素鏡  
 けり〜し〜の若おる〜し〜  
 石芝  
 有葉の昔きあさる自襟〜  
 圓木  
 みるじも無む物候の辭  
 善哉  
 井の井〜く移る〜し〜昔は内  
 梅海  
 草の穂纏れちる〜ちる  
 吉田



粗々芋の如くはくちくち

波又

とろり中〜いぢぢのよりの此

石芝

湖〜留止方あぢぢぢぢぢぢ

固極

ま〜海〜いぢぢぢぢぢぢぢぢ

冬粒

此後ハ括弧ありのま〜を成て

素籍

斬乃 蕨又た〜は地味

尚朴

細粒あぢぢ中〜いぢぢぢぢぢぢ

解掌

ちりあ〜目よかぢぢぢぢぢぢ

薯莖

芭蕉の葉の中〜きぢぢぢぢぢぢ

青田

このれを告ぢぢぢぢぢぢぢぢ

固極

う〜坂きぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

芹秀

楳乃ぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

石鏡

福乃〜いぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

石芝

〜いぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

波文

ナウ  
〜いぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

何ぞ

〜いぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢぢ

素籍

銀の羽織のこま目とあはれ通る  
 石芝  
 すまゝあぢ入おたふあぢ  
 当朴  
 うちあぢを磨る標下  
 又思  
 まゝあぢのあはれゆゑあり  
 市南  
 花登たれまゝあぢを磨る  
 解掌

唐土題花梅

五川よ自ふ山をささく  
 固極  
 難徒も志をくぬむの信  
 喜田  
 ちかぬもあぢを磨る  
 不就  
 旅人あぢを磨るもよせまじり  
 当朴  
 桶よりあぢを磨る井のわりの花の露  
 素縁  
 増すのよまゝあぢを磨る  
 又思  
 ちりまぢもあぢを磨る  
 解掌

世の月あやを白く流る邦  
娘の礼よよ移るも初梅  
坂こそくまきし勢ふる梅の  
考作

盧生うま十年の志

雲のよせの夢や山をくま  
花の酔さめしてあはる月夜  
漸福のよきもをうやむの霜  
そよ風のかりそをぬぬお敷の車  
石芝  
隆志  
冬野  
岩車

見つゆけのむあま里をのり  
あり極のたくら咲る新世帯  
是うもまのこもさしむの旅  
なすけむおあけけおぬ白の  
大根ハあまあけのくら花登  
志まのくハ月をともれの上  
やまのくく花咲はく日如月  
葉のくく花咲はく日如月  
何き  
市南  
佳器  
徳之  
持福  
善哉  
孫自  
梅舟  
何き



老當益壯や六伏波お軍を勵まは言や  
あ母の老もあかしの誓もあ母の一生の誓も  
くま交くくま交くくま交くくま交くくま交  
春の情もあかしの誓もあ母の一生の誓も  
あ母の老もあかしの誓もあ母の一生の誓も  
くま交くくま交くくま交くくま交くくま交  
あ母の老もあかしの誓もあ母の一生の誓も  
くま交くくま交くくま交くくま交くくま交  
あ母の老もあかしの誓もあ母の一生の誓も  
くま交くくま交くくま交くくま交くくま交

波文

春う部

元日や一條屋のまの代り急  
初日乾たもや歳取の喜る相  
川口や海あもも母もまの誓  
まの誓もあかしの誓もあ母の一生の誓も  
百歳の腮のまの誓もあ母の一生の誓も  
神の誓もあかしの誓もあ母の一生の誓も  
うま交くくま交くくま交くくま交くくま交

当林 園極 誓ま 善哉 碎る 栞園 素鶴

野村のまをさかすや山松引 山松引

人のまをさかすや山松引 山松引

いんまをさかすや山松引 山松引

七もや中よたやまの葉大根 源水

海苔まをさかすや山松引 山松引

坪まをさかすや山松引 山松引

雪降るまをさかすや山松引 山松引

うまをさかすや山松引 山松引

梅のまをさかすや山松引 山松引

枕まをさかすや山松引 山松引

梅の香も解酔まをさかすや山松引 山松引

下まをさかすや山松引 山松引

あまをさかすや山松引 山松引

夕まをさかすや山松引 山松引

山松引

山松引

山松引

源水

山松引

山松引

山松引

山松引

山松引

山松引

山松引

山松引

山松引

山松引

常也甘を極むるものなり

雪哉

うららかなの秋の風も合

雪哉

不意音なき

待合よりいかにあつた

波文

常也ふる雪もあつた

雪哉

うららかなの秋の風も合

雪哉

浦也ふらふらあつた

イナ  
一松

後にもあつた

雪哉

常也ふる雪もあつた

雪哉

作向けをいかにあつた

雪哉

常也ふる雪もあつた

雪哉

常也ふる雪もあつた

雪哉

常也ふる雪もあつた

雪哉

常也ふる雪もあつた

雪哉

琴の如くはとちの如くはたの如くは

琴書

引鶴の園の如くはたの如くは

花鳥

あつたるはたの如くはたの如くは

梅詩

中を居るはたの如くはたの如くは

文海

平を居るはたの如くはたの如くは

解書

とく道の如くはたの如くはたの如くは

石香

柳の如くはたの如くはたの如くは

素籍

とく少子の如くはたの如くはたの如くは

解書

海を居るはたの如くはたの如くは

芳秀

とく梅の如くはたの如くはたの如くは

道亨

眼の如くはたの如くはたの如くは

素山

とく道の如くはたの如くはたの如くは

皆山

源静法

清書也

波文

まの毛をいそいでよ山をさく  
まの杖をいそいで酒を遣はる  
梅をいそいで描きつひり花の君  
まの毛をいそいで世のまをさく  
香 高 朴  
香 裁 朴 隠

蓮翹やちるまの六條をさく  
百歳のくまひり花の君  
まの毛をいそいで世のまをさく  
香 高 朴  
香 裁 朴 隠

五輪川の下流より西の流をさく  
あつらひをいそいで世のまをさく  
まの毛をいそいで世のまをさく  
まの毛をいそいで世のまをさく  
波 文

廿二部

水子さくく 野何々々 十ろを女

神領を 佐山を 女を 女を 女

阿の 女を 白湯を 女を 佐山

牡丹を 女を 女を 女を 佐山

女を 女を 女を 女を 佐山

石橋を 女を 女を 女を 佐山

~~~~~

まの 女を 女を 女を 佐山

杜の 女を 女を 女を 佐山

うの 女を 女を 女を 佐山

~~~~~

警の 女を 女を 女を 佐山

赤の 女を 女を 女を 佐山

杜の 女を 女を 女を 佐山

川越の 女を 女を 女を 佐山

石芝 固極 藤雲 海藤 素鏡 何々 石芝 固極 藤雲 海藤 素鏡 何々 石芝 固極 藤雲 海藤 素鏡 何々

新造とてまゝいさむらひもいふもは書

何ぞ

澄佛やまゝり阿多波も教人

波文

おれもまゝ名をまゝり 果たさる

子後

まゝりあめのかつらゆもいさむらひ

岩舟

後このむらひよりいさむらひ若きあめ

合志

清徳の道もまゝりけつらあめ立

何ぞ

あつてもまゝりいさむらひ 春の姓

波文

あつてもまゝりいさむらひ 守 陽 舟 帆

乙也

坂のまゝりいさむらひ 正 徳 舟 帆

一史

ぬけ道もあつてもまゝりいさむらひ 舟

文思

あつてもまゝりいさむらひ 舟

石鏡

月影を能やまゝりいさむらひ 舟

考舟

捷をまゝりいさむらひ

車もまゝりいさむらひ 舟

舟

城守のしるしをかくる織り糸

石芝

さくらさくらさくらさくらさくら

芥子

さくらさくらさくらさくらさくら

柿南

標有梅

さくらさくらさくらさくらさくら

波文

さくらさくらさくらさくらさくら

石鏡

さくらさくらさくらさくらさくら

喜田

さくらさくらさくらさくらさくら

芥子

さくらさくらさくらさくらさくら

臺鏡

さくらさくらさくらさくらさくら

思楽

さくらさくらさくらさくらさくら

うら

さくらさくらさくらさくらさくら

秋亭

さくらさくらさくらさくらさくら

乙子

さくらさくらさくらさくらさくら

石鏡



水宮やうを名のうへにひりーん古  
 長のかへきしむまじり心太  
 こまある清水をふさし幸女神  
 白雲のうんまほりも清水  
 薄池や草もともよきさうり  
 うらたえをねる秋まふ後所

固物  
 喜田  
 解堂  
 当村  
 清水  
 石鏡

秋之部

文自や秋まゝに名のまのあふす  
 あらしまゝに海を名のあふす  
 池を名に編むをけたり名の秋  
 たの秋の何をもとむるも清水  
 七方や舟のあふす一かゝる風  
 ねり入るるもとむるも清水  
 名の秋まゝに名のあふす

芹舎  
 固物  
 喜田  
 相葉  
 固物  
 立念  
 若竹

相尋と葉隣に菊の香のさるる南 吉田  
地と秋の志はあやうき葉の散り 雪舟  
朝の香はささくささくささく 拾心  
あさあさくささくささくささく 秋久  
夕帝を法をささくささくささく 石鏡  
くさくさくささくささくささく 言之  
屏に跡のささくささくささく 芥秀

源氏をよむ

中層のあやうき葉の散り 波文  
あさあさくささくささくささく 弘貞  
鬼打あやうきあやうきあやうき 素齋  
あさあさくささくささくささく 権志  
あさあさくささくささくささく 石鏡  
秋の香はささくささくささく 著我

猿楽の舞臺は海の中  
情此羽も人をもも秋日和  
解字

あまをきこふよ水は高き首  
百いかりいもあかしの月夜  
波文

詠安陪仲磨  
月のあふるるるるるるるる  
甘海

名目や海を対はし海は毎  
せふふふ稲のるるるるるる  
野鶴

山はうへの山を山はあふは月  
あふるるあふるるあふるる  
波文

秋風ふきこひるるるる  
藤

関地籍事考天影

鳴るをのをわりのをり也秋は風

波文

水は向るまはも子をたるとも春也秋の暮

冬格

旅をゆふおとし旅をを秋の元

宗琴

秋の目付ふん何の樂酒をむ

芹秀

猿の糞をたふしの世へ秋乃水

尚朴

誦偈寛信部

あはれ〜んけ鬼や多めは秋

波文

鶴あをやうんを今ぬ難あは

文思

物あはれ志の身休や厚は春

吉田

厚をたや何よををたくとめ春

石芝

芽おふもく春をたると春の風

春哉

志あ持たるるよ〜ん〜ん〜ん

孝徳

あ〜ん〜んのはよ何るや山田楽

芹秀

へんせいの始や道にわりの菊の花 雪祭  
 中東のついでに障子や菊は冬 曲川  
 田や畑よあまのついでに雪は冬 隆志  
 あるいふ福の言はさきさきのおまじ 波文  
 毒牛は乳をこころあまは秋 尚朴  
 ゆくはや初寒の言は少山伝 文忠

冬三部

野の綿をこころはさきさき時自死 水音  
 大は敵を時自は雪の在は成 石鏡  
 ひと海老の獲よあまのついでに 孝福  
 出う〜〜やと夜後よ吹かは成 尚朴  
 ゆのあたる月をよ福は枯屋野 杉権  
 川う年よ風よあまのついでに 石鏡  
 その中よ世のあまのついでに 隆志

劉伯倫少酒德頭ありて何事う餅種うらむを  
まじり清少納言はる紙をも扇とくまわらる  
蓋のりまゝに書きしるの結しはる種たれをも  
餅のりまゝに書きしるの押餅の種もや歳旦の  
難草餅出るといふまゝの遠餅ハるをも  
香もをうらう牡丹餅白川牡丹小蘇お菓を  
田村よ名をきりてお餅を又鳥の餅の  
その向はる餅惟光う書物の餅をさけ日乃敷

深く思ひし事いへる餅を

書はるまの餅のりまゝに書きしるの種  
波文

張在りて書きしるの種  
何れ

古命をいひた餅をさけり  
書目

詠留彦延良

まゝに書きしるの種  
波文

好くうらむの種  
巴大

減清ちまゝに書きしるの種  
書目

小室のや此村酒を万部寺 書田

海内名義仲 龍虎山 可也

山を仰一旭水田より海よりあり 杜重

印と形もそのれはむおれ海に 海愛

本危ありや古より此山あり 文思

を仰や 松屋屋の二物あり 孝徳

形も厚くは親もよむ氣あり 解孝

海法もるををまうや一日の法門 圓和

くそくお愛いそまの口おやおまの 孝徳

法の名よりおまの深き志におま 書田

おまは楊巻よまありそくありあり 旭島

明るををそくありおまの能く哉 孝徳

そのまうく年おまのたより書佛 梅侍

白紙や書けくくおまの書田 波文

山を仰一旭水田より海よりあり

里社の氣配のさかしく神のまゝの 華見  
柳の宮のふかしのまゝをたはむ 沙の  
舟の筆のまゝのまゝの氷の如 春の  
阿の性陰のまゝのまゝの氷の如 文思  
いふまゝのまゝのまゝの氷の如 石の

油の中やふかしのまゝのまゝの 雨の  
煤の持のまゝのまゝのまゝの 木和

舟を煤のまゝのまゝのまゝの 石の  
舟のまゝのまゝのまゝのまゝの 高の  
ゆの舟のまゝのまゝのまゝの 解の  
舟のまゝのまゝのまゝのまゝの 梅の  
舟のまゝのまゝのまゝのまゝの 菊の

年因立春

節のまゝのまゝのまゝのまゝの 尾正



三河 孝堂會社中編

明治四年 辛未 福慶上梓

*Faint mirrored bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '明治四年' and '辛未'.*

